4 1989～1994年の5年間に当教室で経験した外部寄生虫の寄生例について 石郷岡清基, 吉村堅太郎, 山下恵子 (秋田大・医・寄生虫), 佐藤俊樹, 岡田理 (同皮膚科), 新田目繁信 (由利組合病院), 長島弘明 (山本組合病院), 村木悦子 (村木医院), 石河知之 (仙北組合病院), 岡部俊一 (平鹿総合病院), 中村正明 (雄勝中央病院), 佐藤家隆 (佐藤医院) Cases of ectoparasitic infections experienced in our laboratory for recent five years (1989-1994) S. Ishigooka, K. Yoshimura, K. Yamashita, T. Sato, O. Okada, S. Aratame, H. Nagashima, E. Muraki, T. Ishikawa, S. Okabe, M. Nakamura, I. Sato

1989年8月から1994年7月までの5年間に経験した外部寄生虫症例を報告した。マダニ刺咬症は42例で、ヤマトマダニが27例 (64%)、ヒトツツゲマダニ4例 (9.5%)、シュルツエマダニ3例 (7.1%)、タネガタマダニ2例 (4.8%)、キチマダニとカモシカマダニ各1例 (2.4%)、その他虫体破損のため虫種同定不能4例 (9.5%)であった。マダニ刺咬は5～6月に最も多く、小児 (0～9才)と50～69才の壮年・老年層に多くみられ、男女別では女性に多かった。刺咬部位は頭・頸部 (顔面を含む) が最も多く60%を占める。陰茎背部の咬着が1例認められた。蠅蛆症4例はキンバエとニクバエの幼虫によるものであり、いずれも67～84才の老人で、膣や外陰部寄生例が3例あった。カバキコマチグモ刺咬症も3例あり、東北地方でも夏期における本種の刺咬に注意が必要である。その他、クロシタアオイラガ幼虫とクロスズメバチの刺傷例を1例ずつ経験した。

6 アクトグラムを応用した養豚場へのキタキツネ接近頻度調査 浦口宏二・高橋健一 (道立衛研医動物)
Analysis on the mode of visits of
radio-collared foxes to a pig farm
Kohji Uraguchi and Kenichi Takahashi

多包虫に感染した豚が発見されている養豚場で、4頭のキタキツネ (成獣メス1頭、幼獣オス1頭、幼獣メス2頭) を捕獲し、電波発信機を装着して、1993年7月、10月、1994年2月、5月の4回、養豚場への接近頻度を調査した。1日平均の接近回数と滞在時間には、個体差と季節変化が見られた。最も頻繁な接近は7月の成獣のもので、1日平均11.6回、延べ滞在時間は1日平均2時間4分であった。幼獣の接近は成長に伴って増加する傾向があり、接近回数は秋に成獣と同レベルになったあと安定したが、滞在時間は冬まで増加を続けた。一方で、養豚場に接近してくる調査個体の数は、分散や死亡によって、10月には3頭、2月には1頭と急速に減少した。このため、すべての調査個体の平均接近回数と平均滞在時間を月毎に合計した値は、季節を経るにしたがって減少する傾向を示し、養豚場への総接近回数と延べ滞在時間が、幼獣の成長に伴って単純に増加するものではなく、個体数減少の影響をかなり強く受けるものであることを示した。

5 ゴマフアブ幼虫の生息地について 高橋健一 (北海道衛研) 早川博文 (国際農研センター) Larval habitats of *Haematopota tristis* Kenichi TAKAHASHI and Hirofumi HAYAKAWA

ゴマフアブの発生源を明らかにするために、北海道東部の清里町で、1991年5月に幼虫の生息地について調査を行った。幼虫の採集は根堀ゴテと素手で行い、調査地の林地の斜面を中心に、表面から5cmまでの腐植土壌を調べた。その結果、ゴマフアブの幼虫36個体が採集された。幼虫は、溪流沿いの緩やかな斜面から、山林のかなり急な斜面まで広く分布していた。調査地点は夏季に成虫が大量に発生することから、発生源と成虫発生地は近接していることが明かとなった。採集時の幼虫の体長は、最大21.5mm、最小7.0mmであった。これらを飼育したところ、飼育開始37日後から44日後の間に10個体の成虫 (雄4個体、雌6個体) が羽化した。羽化個体はいずれも採集時の体長が15mm以上の個体であった。